

遊方考(二)

大西龍峯

三、商胡と遊方沙門

求法と伝導のために旅をする沙門に、必要な知識や物資を提供した西域の商人たちには、おそらく仏教の熱心な信者も少なくなかったであろう。辺境の地で奴隷の境遇に落ちた僧叡の難を救った商人も、もちろんそうであったろうし、その中には、安玄のように、自ら訳経に従事し得るほど深く仏教の教理に親炙していた人もいたのである。こうした深い信仰と理解をもつ商人たちの子弟から、また少なからず僧侶になる者があらわれるのも不思議ではない。康僧会や仏駄跋陀羅などは、その例である。

だいたいインドや中央アジアからはるばる危険を冒してやってきた仏教僧の生き方や考え方を見ると、国際貿易に活躍する商人たちのそれと深く共通する部分もあったように思われる。すなわち、彼らは、

常に遊化を貴びて、専守を楽ながわす。(『高僧伝』曇珂迦羅伝)

異邦の地を訪ねて法を伝えることこそ、すぐれて意義ある行いと考え、ただ、教えを守ってひたすら修養につとめるだけでは満足できなかったのである。それは、商人が安全を第一とする小さな商売で満足せず、自分の商品を異邦の地にもたらして大きな成果を得ようとするのとはなはだ似ていよう。

志は遊化に在り、居安きことを求むる無し。(同上・仏駄跋陀羅伝)

また旅を尊重し評価する以上、当然ながら、彼らにとつて、生活の平安は、第一の関心事とならない。日々平穩無事というような小市民的生活観を奉じていては、旅そのものに対してネガティブにならざるを得ないからである。しかも、若い頃から旅に親しみ、様々な土地に往来し、異質な文化や風俗にふれる機会にも恵まれていたようである。

少くして遊方を好み、備に風俗を觀る。(同上・竺仏念伝)

少くして遊方を好み、宣化を誓志し、諸国を周歴す。(同上・曇摩密多伝)

少くして遊方し、滞著する所無し。(同上・智嚴伝)

そのため、しばしば彼らはバイリンガルであり、かつバイカルチュラルでもあったから、特定の国の伝統や習慣に拘束されない、自由な行動規範を身につけることになった。もとより一カ所に腰を落ちつけ根をおろして住むことにも、さほど執着がないのである。こうした傾向は、明らかに国際的な活動をする商人にこそ見られるものであり、土地に密着して生き、家族や村など共同体としての結合を優先し、伝統や習慣をなにより重視する農民もしくは封建領主などとは、まるで背馳した特質にはかならないであろう。

また布教伝導に対する意識にしても、

少くして觀方し、諸国を遍歴し、常に謂う、弘法の体は、宜しく未聞に宣布すべし、と。故に遠く流沙を冒し、宝を懐きて東のかたに入る。(同上・曇摩難提伝)

その要点は、教えをまだ見たことも聞いたこともない土地にもたらすことだとされている。そして「宝を懐きて」とあるように、自ら伝えようとしている教えを、どこの国の人々にも喜ばれ珍重される財貨とみなしていたのである。これは西域の商人が、自分の扱う工芸品をすぐれた技術の結晶であり、世界中の人がほしがる財貨と自負していたのと共通した

認識であろう。

相違は、商人がもたらす物は、形があり目に見える物質的な財であったに対し、仏教僧がもたらすものは、形がなく目に見えない精神的な財であったことだけである。実際両者のもたらしたものは、中国において、世にも珍しい、不思議な魅力を放って人々の心をとらえた。

このように両者は、その志すところ、性向、意識や行動に、非常に親近性があり、車の両輪のように連携して相応している。

思えば、中国に伝えられた大乘仏教自体、その成立に商人の深い関与を感じさせる点が、きわめて多く認められる。經典に説かれる物語や譬喩には、財をなした商人がしばしば主人公として登場するし、『維摩經』のようにまさに商人が説法の主となっている經典さえある。また大乘が称揚する菩薩像も、教えを守り禁欲的修行に励む出家者の姿ではなく、『般若經』の常啼菩薩や『華嚴經』の善財童子などに見られるように、強い意志と冒険心に富んで、困難な旅に敢えて挑戦する人として描かれている。

六波羅蜜の「波羅蜜」に到彼岸の解釈がなされるのも、旅をする菩薩のイメージが反映していたからであろう。いや、それどころか、困難な旅こそ、六波羅蜜のもっともすぐれた実践であったといつてよかろう。布施の徳目が六波羅蜜の第

一に挙げられ重視されるのも、その内容が声聞の仏教で説かれた布施とは異なつて、『六度集経』に示されるような、不惜身命の意志と決断という菩薩の根本的行動原理をあらわすものだったからに相違ない。

この点、従来大乘仏教の性格に関して、在家仏教ということが言われてきたが、実のところ商人仏教とも呼ぶのが正当である。実際、こうした郷里を遠く離れ、長期にわたつて異邦にさまようことを是とする考えは、土地に根ざし血縁地縁を重視する人々の場合には、その信念を深く問われる性質を有し、きわめて受け入れがたい発想なのである。

また大乘の成立に関して、仏塔信仰を核として展開したという説がなされているけれども、この点も、むしろそうした仏塔を寄進し信仰した信者の性格にこそ注目すべきではなからうか。すなわち冒険的な旅をして財を築き、インドの伝統や習慣にとらわれず、より自由で実践的な考え方をもつた商人たち、彼らの問題意識こそ、大乘の成立を論ずる上で、もっとも重要な要素であろう。

声聞の仏教は、伝承を重んじ、専門的な知識と世俗から切り放された生活に裏づけられた権威を奉じていたが、それは伝統芸能などによくあるように、時とともにたぶん閉鎖的で、風土色の強い性格を増していったに違いない。インド的な習慣や発想が深く浸透してきただけでなく、教えのもつと

も深い点は、インド人にしかわからないといった民族主義も生まれていたかもしれない。もちろん、こうした仏教を、尊い聖なるものとして奉ずる信者は、なおたくさんいたであろう。しかし、人生のほとんどを異境を往来することであり、ともすれば根無し草とみなされる商人たちには、このような権威主義的仏教はとうてい肌合わないし、人生観や世界観にしても、かなりかけ離れていたにちがいない。彼らには、広い世界を見、困難を切り抜けて成功を勝ち取った自負があり、その自負から仏教に対しても、より自由で実践的な解釈を行う力を汲みとつたのである。

『維摩経』において、声聞仏教の専門家であり権威である十大弟子が、ことごとく小さな世界に閉じこもって自己満足に陥っていると論破され弾劾されるのも、そのためであろう。またアポロン仏のように、仏陀がギリシャ的な風貌によつて示されたり、様々な仏菩薩の性格にインド的でない要素が現れているのも、そのためであろう。

したがって沙門のありようも、大乘では、静所で瞑想に耽るとか、僧院にあって教理を研究するとか、道果を得るためにひたすら苦行を實踐するといったことに重きを置くものになつた。

沙門は当に觀方弘化して曠濟を懷とすべし。何ぞ小節獨善を守るのみなるや。道は衆縁を仮りて復た時に熟すべし。(同上)

曇摩耶舎伝)

自己一身の問題にばかりかかずらわず、大きな世界にて、見聞を広め、多くの人々にふれ、様々な経験をすること、まさにそうした中でこそ修行の実もあがるし、成熟も得られるとしたのである。かくして大乘の沙門は、六波羅蜜の実践たる遊方に志し、好んで異質な世界への旅にでたのである。

四、孝の倫理と遊方

西域渡来の商人や沙門によって、様々な文物とともに、旅の嗜好が中国にも伝えられた。しかし、孝という家族原理をなにより尊重する中国の社会では、こうした嗜好ははなはだ制限されていた。

父母在せば、遠く遊ばず、遊ぶに必ず方有り。(『論語』里仁篇)

この言葉は、中華民国初年の思想革命の時期、孔子の思想の封建制が攻撃された際に取りあげられた言葉であったように、⁽¹⁾「父母在せば、遠く遊ばず」では、外国留学などできないではないかと非難された。そうした非難にも端的に示されているように、この言葉は、旅を否定もしくは制限する言葉として古くから知られていた。

その一般的解釈は、両親が生きているうちは、子たる者、

遠い旅をしてはいけない。遠い旅に出れば、もし両親が何か急に子の助けを必要とした場合に、すぐに駆けつけることができないし、また子が旅路で危難に遭遇してはいないかと両親を心配させることにもなる。

いわば、必要があればいつでも応じられるよう近くにいて、両親に余計な心配をさせないこと、これが孝道の基本だといっているのである。したがって、旅はできるだけしないのが良い。それでも、どうしても旅をしなければならぬのであれば、行き先や目的や日数など、必ずはっきりさせ、未知の土地をうろついたり予定にない行動をとったりしない。つまり、極力冒険を避けることが子たる者の生き方であり、勤めだったのである。

こうした主張は、五経の『礼記』にも説かれている。

親老いたるときは、出ずるに方を易えず、帰るに時を過ぎず。(玉藻)

親が年老いたときは、出かけて途中で予定を変えたり、あらかじめ告げておいた時間に帰らない、ということがあってはならない。また

夫れ人の子たる者は、出ずるときは必ず告げ、帰れば必ず面どおりす。遊ぶところ必ず常有り。習うところ必ず業有り。(曲礼)

人の子たる者は、出かけるときも帰ったときも、必ず親に

その旨を報告しなくてはいけないし、また旅をするにしても学問するにしても、おのずから制限がなくてはならない、というのである。

儒教を国学とした漢代以降、中国では、何をするにしても孝の倫理規定に沿うかどうか、常に大きな問題とされていた。官吏の登用にしても、郷挙里選で、地域社会の評判がものをいいたのであり、評価の対象となる徳目の第一はもとより孝であった。後漢になると、孝を尊重する意識はさらに高まって、ほとんど信仰と呼ぶべき情熱が見られ、すでに「孝廉」という選挙制度があるにも関わらず、新たに「至孝」という選挙科目が制定されるのである。⁽²⁾ 孝を尽くすことで人に秀でたものは、もうそれだけで官吏とするに足るとされたのである。仏教の隆盛した六朝期にあっても、『孝経』と『論語』は知識人の必須教養であり、孝を称されることは、きわめて名誉なことであった。それは儒教を奉ずる人だけでなく、仏教の出家者でも同様だったらしく、『高僧伝』を見ると、孝を称されたことを特筆した記述が、枚挙に遑もないほどあらわれている。

しかし、孝をどこまでも尊重するとなれば、求法であれば布教であれ、遠い旅をすることはできない。一方、菩薩道の実践には、むしろ積極的に旅をする必要がある。中国の仏教僧は、こうした葛藤に逢着した。

遊方考(二)(大西)

具戒の後に及んで、便ち観方弘化せんと欲す。毎に訓育本有るを惟たゞいて、未だ縁累を遠絶する能わず。明謂いて曰く、沙門は俗を去り、宣通を理と為す。豈に此の愛綱に拘わりて、吾が道をして東せざらしむべけんや、と。亮感悟し、此れに因つて客遊す。(『高僧伝』宝亮伝)

宝亮は、戒を授かって正式に僧となると、修行の旅に出たと思った。ところが、父母がまだ生きていて、それを放つておいて自分一人遠隔の地に長い旅に出ることは、どうしても憚られた。そうした宝亮の気持ちを察した師匠の道明は、沙門となれば、もはや世俗生活を去っているのであり、法を学び広めることを責務としているのだ。世俗的な情愛にとらわれて、布教を断念することがあってはならないと諭した。宝亮は、この言葉で、ようやく旅に出る決心がついたのである。

たとえ強い道心をもって出家しても、身についた家族倫理は、なかなか簡単に払拭し得ないものがあったわけである。それを乗り越えていくには、より大きな原理が必要であった。

親を安んじて以て一家を成すは、未だ道を弘めて以て三界を済すくうに若かず。(同上・竺僧度伝)

ここには、親に孝養を尽くすより、法を弘めることの方がはるかに価値があるという考えが高らかに宣言されている。そして孝の倫理よりもさらに尊重されるべき大義があるとい

うこの考えは、中国の知識人に大きなインパクトを与えることとなる。単に父母が在世であっても遠い旅に出立することができるようになっただけでなく、意識の中で制限されていた様々な欲求や願望も解放されることになったのである。というのも、孝の倫理から自由になることは、「家族全体の利益」という重圧から自由になることであり、いわば個人的な意志決定がかなり可能になったということだからである。

(未完)

注

(1) 宮崎市定『論語の新研究』二〇二頁。

(2) 福井重雅『漢代官吏登用制度の研究』(創文社、一九八八)

第三章 第五節「至孝と有道の察挙」三五二―三七二頁。